

離島の介護を担う福祉拠点

高齢者生活福祉センター・とらず園

今帰仁村の運天港からフェリーで1時間20分、沖縄本島の北西約40kmに浮かぶ伊平屋島は、人口約1600人の沖縄最北端の有人島である。

この伊平屋島では、離島の高齢者福祉を支える拠点として「高齢者生活福祉センター・とらず園」が設置されており、介護サービスや地域交流事業が実施されている。

ここでは、主に離島の介護を支える生活支援ハウス（高齢者生活福祉センター）の機能を中心に、その活用について紹介する。

離島の介護を支える複合施設

伊平屋島は人口約1,500名、高齢化率25%の島である。豊かな自然と人情が残るこの島に「高齢者生活福祉センター・とらず園」が設置されている。「高齢者生活福祉センター」とは、おおむね60歳（とらず園の場合は65歳）以上の高齢者等を対象に、生活介護のほかに地域住民との交流などの機能を持たせた複合型施設である。制度創設当初は離島・過疎地域を中心に設置が進められ、県内には、伊平屋村のほかに多良間村、南大東村、渡嘉敷村の4離島村に設置されている。現在では「生活支援ハウス」と呼ぶ場合が多い。



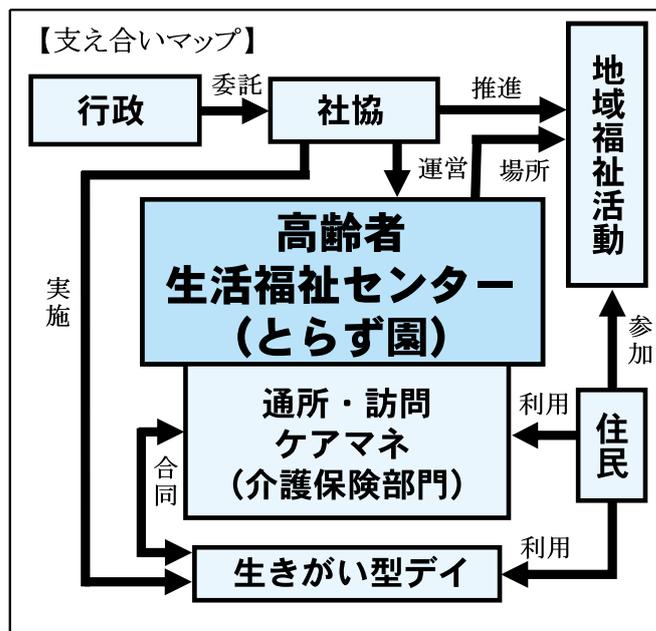
▲とらず園の外観

「とらず園」には居室部分として20人分が設置されており、内装や外観は小規模の特別養護老人ホームといったところである。このセンターの運営は村からの受託で社会福祉協議会が行っている。

とらず園には居室部分に加え、社協が設置主体の介護保険事業所（通所介護・訪問介護・居宅介護支援）が併設されており、入居者は介護保険の適用を受けて介護サービスを利用することができる。

併設の通所介護事業は、25人の定員で、とらず園の入居者や地域の高齢者のべ30人が利用している。朝9時から手工芸や創作活動、ゲームなどを楽しみ、昼食後、アクティブなゲームなどを行い午後4時に帰宅する。

とらず園の特徴は、介護保険事業の通所介護事業と「生きがい対応型ミニデイサービス」を合同で実施している点にある。毎週火曜日～木曜日までの3日間は、伊平屋村内



の各地域のミニデイサービスを同じ空間・同じ時間に行い、利用者や住民の健康維持と交流を図っている。

とらず園への入居は特養ホームなどへの「入所」と異なり、サービス区分は在宅扱いとなる。よって、利用者は居住にかかる料金として月4万5千円を負担のほか、別途、介護保険適用の1割負担として平均3万円程度の利用料を支払っている。

離島においては採算性や効率面の観点から民間事業者が参入しにくい

状況にある中で、とらず園のような「多機能性」を有する社会資源は村民の福祉向上に大きな役割を果たしている。

住民念願の福祉拠点として誕生

とらず園は平成8年に沖縄県初の高齢者生活福祉センターとして設置された。特別養護老人ホームなどの入所機能を有する大規模施設を持たない伊平屋村にとって、まさに住民念願の福祉拠点の誕生であった。

とらず園は介護保険適用前から措置による各種福祉サービスを提供してきたが、平成12年に介護保険制度がスタートすると、入居する利用者や地域に暮らす要介護高齢者を対象に通所介護や訪問介護などの各種介護保険サービスを複合的に行うようになった。

また、伊平屋村社協は平成13年度から17年度までの5年間、沖縄県単独の補助事業である「ゆいまーのまちづくり事業」の指定を受け、伊平屋村内の地域福祉活動の活性化に取り組んだ。この事業においても高齢者生活福祉センターがもつ多機能性が大いに活用された。

日常的に地域と交流

前泊港から歩いて5分、小高い丘の上にあるとらず園では、福祉サービスを利用する利用者と地域住民との交流の機会も多く取り入れている。秋になると婦人会や学校の児童生徒の訪問活動や、園主催の敬老会などが行われる。また、生きがい対応型デイサービスとの合同実施によって、日常的に地域の高齢者との交流を行い、地域とのつながりを断ち切らない関係性を築いている。

とらず園の運営を村社協が受託することで、地域福祉活動の円滑な実施と、施設のさらなる有効活用が実現し、島の福祉拠点として機能している。

自然とリハビリやリフレッシュ効果につながっている。

脳出血のため左半身に麻痺が残ったため、とらず園でショートステイや通所介護をよく利用するという前田芳正さん（53歳）は、「ここで過ごす時間は最高です。レクや将棋をして楽しんでいます。」と語る。日ごろは家に閉じこもりがちというが、デイサービスを利用することで、体を動かすだけでなく、いろいろな人と接することで、自然とリハビリやリフレッシュ効果につながっている。



利用者の能力に応じたプログラム開発・地域への展開が課題

とらず園の特徴の一つでもある生きがい対応型デイサービスと通所介護（介護保険）の合同実施は、地域交流の実現や設備の有効活用というメリットを生んでいる。

しかしその反面、双方の参加者には身体能力に違いがあり、それを考慮したメニューを考えなければならないため、苦勞も多いという。とらず園では今後、文化教養的な要素を取り入れたプログラムの開発や男性利用者の開拓などに力を入れていく考えだ。



▲とらず園では介護保険の通所介護事業利用者と生きがい対応型ミニデイの利用者が合同でレクを行う。

離島の実情に合わせた「小規模かつ多機能」設置促進を

伊平屋村社協では今後も、高齢者生活福祉センターの特性を生かした事業展開を目指していく考えだ。人口規模や利用者が少ない中でも、多様なサービスを効率よく提供していくためには、とらず園のような「小規模かつ多機能」な福祉施設が求められている。高齢者生活福祉センター（生活支援ハウス）はまさにこうした施設であり、離島の実情に合わせた設置の促進が求められる。



「島で暮らし続けたい」を支える

サテライト型デイサービス「いこいの家」(うるま市津堅島)

平敷屋港からフェリーで30分、勝連半島の南東5kmに位置する津堅島は人口約600名余の島である。

半農半漁のこの島で、特別養護老人ホーム与勝の里がサテライト型デイサービス「いこいの家」を開設し、島での暮らしを支える活動を展開している。

民家を利用したサテライト型デイサービス

うるま市勝連(旧勝連町)にある「特別養護老人ホーム与勝の里」では、同地区の津堅島において、サテライト型デイサービスを実施している。

「サテライト型デイサービス」とは、地域にある集会所や民家をサテライト(衛星)局として、そこに、母体事業所の職員が出張してサービスを実施する出前方式のデイサービス事業のことである。



▲デイサービスの昼食風景。まるで自宅にいるような内装に気分もリラックス。

島の民家を改修したこの事業所は

「いこいの家」と名づけられ、月曜日から金曜日までの週5日開所している。

いこいの家では平成18年6月現在、25名が登録し、毎日約15名が利用している。スタッフは、相談員、看護師、介護員、調理員(3名)の計6名で、そのうち4名は津堅島の住民、2名は本島から午前8時半のフェリーで島に渡ってくる。

9時から利用者の迎え、健康チェック、入浴、相談、レク、昼食、談話等を行い、午後3時すぎに自宅に送り届ける。

大規模な福祉施設がなく、一人暮らし高齢者も多い津堅島にあって、この「いこいの家」のサービスは住民に大変喜ばれている。

また、毎月1回、公民館で島の住民を招いての「交流会」を実施するなど、年間を通して地域住民との交流を図る機会を設けているのも特徴である。このように、「いこいの家」のサテライト型デイサービスは島の高齢者福祉を支える受け皿となっている。

与勝福祉会では、いこいの家のデイサービス(通所介護)の他にも訪問介護・短期入所・居宅介護支援が併設されており、入居者は介護保険の適用を受けて介護サービスを利用することができる。

を行うもので、定期的実施している。この他にも「十五夜あしび」と呼ばれる月見会や、幼稚園・小学校との交流会、施設との合同発表会等を企画するなど、積極的な交流の機会を設けている。その結果、事業所に対する理解も深まり、活動に対し、区長をはじめ地域の方々の積極的な協力の輪が誕生した。

離島でのサービスを通して学ぶことも多い

取材に訪れた日、いこいの家の利用者で最高齢の伊覇栄徳さん(98歳)は、「ここではみんなに会える。いつも楽しみにしている。」と話した。

生活相談員の根川さんは「みんなと一緒にだと食欲もわきます。また、閉じこもり防止につながり、島のお年寄りが元気になっていきます。」と利用者の様子について語った。



▲地域に密着した活動も大切にしている。地域住民との交流会はいつも第盛り上がりで笑いが耐えない。

与勝の里の長浜施設長は、「小さな島から大きな施設が見える。小さいからこそできることがある。」という。例えば、本島の施設では持ち運びやすい折りたたみ椅子を使用していたが、島の民家に合う椅子を探したところ、折りたたみ椅子の座り心地の悪さに気がつき、本島の施設の椅子を買い換えたことも。また、設備面だけでなく職員の接遇面などでも本島の施設での福祉サービスの改善に役立っていると話す。

現在、1日あたり15名程度の利用者を受入れているが、島民の高齢化や要介護度の重度化によって今後ますます福祉ニーズが高まっていくものと考えられる。

与勝の里ではこうした課題に対応すべく、いこいの家の増改築や、新たな拠点の整備も視野に入れ準備を進めている。

「島で暮らし続けたい」に応える施設整備を

現在、津堅島には入所できる施設がないため、介護度が重度化し在宅での生活が困難になると本島の老人ホームや老人保健施設に入所せざるを得ない。しかし、地域で暮らし続けたいと願う島民が多く、グループホームや小規模入所施設などの利用ニーズは高いものと思われる。うるま市では平成19年度にむけて、小規模多機能型で、入所機能を兼ね備えた福祉施設をオープンする予定で準備を進めている。

「年をとってもずっと生まれ島で暮らし続けたい」という島民の願いに応えるべく、与勝の里では住民や行政と連携しながら活動していく予定である。

生涯暮らし続けられる久高島を目指して ふばの里ミニデイサービス（南城市久高島）

南城市知念の安座真港からフェリーで東に 20 分、沖縄本島の東約 5km に浮かぶ久高島は、人口約 300 人の小さな島である。古くより神の島とされ、イザイホーをはじめとする多くの祭事が残る久高島で、ボランティアグループによる高齢者を対象としたミニデイサービスが続けられ、島民の福祉向上の一翼を担っている。

ここでは、久高島の住民福祉活動と介護を取り巻く島の現状を紹介する。

島の高齢化率は 40% 月 2 回の介護予防に注力

久高島は人口約 300 名足らずにもかかわらず、65 歳以上の高齢者が人口に占める割合が約 40% もあり、超高齢化の島である。しかしながら、島内は入所型の介護施設がなく、介護保険のサービスは訪問介護と通所リハビリ（島外）を数人が利用している程度で、要介護状態になれば島外に移らざるを得ない状況となっている。

こうした中、久高島のボランティアグループ「ふばの里」では、平成 15 年からミニデイサービスを実施し、高齢者の閉じこもり防止や介護予防などの効果を挙げている。

平成 18 年 6 月現在、ふばの里では毎月第 2 火曜日に行われる行政委託のミニデイサービスに加え、第 4 火曜日にも独自でミニデイを行っている。

このミニデイは、集落の中心部にある離島振興総合センターを会場に、午後 1 時半～3 時半の時間帯に行われる。開始時間前にはセンターを管理する区長の協力を得て、島内アナウンスで参加を呼びかけている。利用者はほとんどが徒歩で会場に訪れる。

取材を行った日のプログラムは以下のとおり。初めにボランティアが血圧・脈拍を測定し、次に転倒予防のための体操を行った。次に理学療法士による介護予防のためのエクササイズが行われた。後半は、お茶を飲みながらの歓談やゲーム、レクリエーションで盛り上がった。ミニデイを運営するボランティアは島内の住民で、手分けしながら連絡調整や会場設営、レクの進行を行っていた。ふばの里の利用者は利用 1 回につき 100 円の利用料を負担している。また、送迎の必要な一部の利用者に対しては自家用車による送迎を行っている。



▲ふばの里で行われる健康体操。体を動かすことで心身ともにリフレッシュし、介護予防の効果も。

住民らで組織される「有見会」を中核に島の福祉向上を探る

沖縄県では離島過疎地域における地域ケアシステムの構築を目指して「離島過疎地域支援事業」を平成12年度から5年間実施した。これは、県内の3離島をモデルとして指定し、高齢者への介護予防や生活支援の体制整備を図るもので、久高島のほかに、波照間島と渡嘉敷島も指定を受けた。

この事業をきっかけとして、久高島に「有見会」というワーキンググループが設置された。有見会は、島内の区長、老人クラブ会長、医師、看護師、教育関係者、村議会議員などが構成員となり、県長寿社会対策室（当時）と県立看護大学と連携しながら、住民福祉の向上について実態調査や支援計画策定を行った。

こうした流れの中で、高齢者向けのミニデイサービスを開催することとなり、島民へボランティアを呼びかけた結果、平成15年7月に、ボランティアグループ「ふばの里」が結成された。

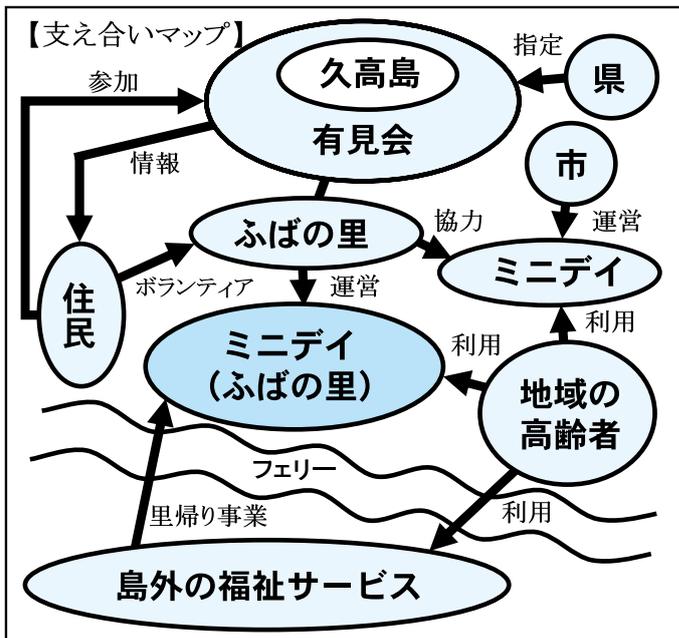


積極的に住民へ情報提供 「里帰り事業」などの試みも

有見会では、離島・過疎地域支援事業で行う調査や話し合い結果の情報を住民へ提供するために「有見会通信」を発行している。

全戸に配布されるこの通信には、様々な福祉サービスや活動が紹介され、住民の福祉に対する関心を喚起するのに役立っている。また、平成15年9月には、介護が必要なため本島の施設に入所している島出身の高齢者を一時的に帰省させる「里帰り事業」を実施し

た。久方振りに帰島する島出身者を島ぐるみで温かく歓迎するなど、地域に密着した活動も展開している。



利用者、ボランティアの声

ふばの里の利用者は、この日行われた転倒予防のエクササイズを楽しくこなしていた。利用者の一人は、「先生たちの体操がとても面白い。足が自然と鍛えられます。」と感想を語る。別の利用者は「勝負するゲームが楽しい」と話す。住民ボランティアが考案した速さを競うレクゲームでは、皆がいきいきとした表情を見せた。



3年前からふばの里に関わるようになった事務局の藤山共子さん

▲おやつを前にくつろぐ利用者の皆さん。ふばの里はボランティアの手作りで運営されている。

は「島の生活や文化を大切にしながら、高齢者の暮らしのお手伝いしていきたい。」と話した。

「島で暮らし続けたい」に応える施設整備を

ふばの里のメンバー西銘明枝さんによると、「島内には家に閉じこもりがちな高齢者が、特に80代や90代の方に多い」という。また、会場となる離島振興総合センターは、島民全体が使用する公共施設であり、「高齢者が落ち着いて利用できるデイサービス専用の場所があったら」と要望する。住民ボランティアが運営するミニデイの利用促進に加え、島全体で介護を支えていけるような施設・設備や人材の確保も当面の大きな課題といえよう。

住民支え合いに加え、在宅福祉サービスの充実を

有見会のメンバーでもあり久高区の区長を務める西銘政秀さんは、島内の福祉の現状について、「ふばの里の活動はとても喜ばれているが、さらなる在宅福祉サービスの充実の必要性を感じる。」と語る。そこで、有見会では島内における福祉サービス事業所の設置に向けて、NPO法人の設立も視野に入れて検討している。しかし、島内には医療・介護に携わる専門職が不足しており、事業所経営のための資金や場所・建物の確保などの面でも課題は多い。

これから先、離島・過疎地域での介護を支えていくためには「生活支援ハウス」のような、小規模で多機能を有する事業所の設置など、行政も積極的に検討していかなくてはならない。

サロン活動こそ地域福祉の原点

ふれあいいいききサロン・宮古島市社協平良支所 (宮古島市平良)

那覇から飛行機で約45分に位置する宮古島市は、平成17年10月に1市3町1村が合併し誕生した市である。中心となる宮古島北東部に位置する平良地区（旧平良市）では、ふれあいいいききサロンの活動が活発で、住民が主体となった個性あふれるサロン活動が各地で展開されている。

ここでは、サロン活動と社会福祉協議会のかかわりを通じて、住民主体の福祉活動への支援の一例を紹介する。

／ 玄関先に掲げるサロン旗 ご近所に寄り合って過ごすひと時

宮古島市社協平良支所では、地域における「ふれあいいいききサロン」（以下、サロン）の普及を進めている。これは、高齢者の健康維持と社会参加の促進、孤独感の解消としての居場所づくりを目的に行われているもので、平成18年12月現在、22ヶ所が実施されている。

平良地区のサロン活動で特徴的なのは、公民館や集会場などの公共施設だけでなく、地域住民の自宅などを活動



▲地域住民の自宅を開放して行われるサロンには元気な高齢者の笑顔であふれている。

場所としている点である。そのため、新規にサロンを立ち上げる際の場所の確保がしやすく、サロンを実施する地域が各地に広がった。また、民家で行うので参加者は顔なじみのメンバーと落ち着いた雰囲気の中でリラックスしてサロンを楽しむことができる。

サロンの一日は次のとおり。定例のサロン開設日になると、玄関先には「サロン旗」と呼ばれる50センチ四方の掛け旗が掲げられ、地域住民を出迎える。開始時間前にはそれぞれ地域の高齢者が訪れ、居間に集まってお茶を飲みながら世間話に花を咲かせる。また、社協から派遣される看護師が血圧測定・健康チェックを行ったり、テープに合わせて民謡や童謡等を歌ったり、踊ったりして憩いのひと時を過ごす。1回あたりの活動時間は2時間程度。こうした活動を月2回のペースで実施している。

最近では、民生委員や老人クラブもサロンの立ち上げや運営に協力するようになり、地域全体・住民主体の活動へと発展しつつある。

各地に広がるサロン活動 住民主体で社協は裏方に

宮古島市社協平良支所では、旧平良市社協時代の平成12年度～16年度にかけて「ふれあいのまちづくり事業」という国・県・市による補助事業の指定を受けて積極的に地域福祉活動の推進に取り組んだ。この事業の一環としてサロンの普及を行い、指定の5年間で18ヶ所のサロンが立ち上がった。その中には、既存のサロンに参加して「自分の近所でもサロンをやってみよう」との声が上がり、他の地域で分立してスタートさせたサロンもある。また、男性の参加者だけで構成されるサロンもあり、各地域のサロンが独自の活動を展開している。

こうした活動に対し、社協では補助事業が終了した現在でも、地域福祉活動コーディネーター（以下、コーディネーター）を1名配置して、地区内22ヶ所のサロン活動のサポートにあたる一方、年間2万4千円の助成金を支出し、活動を支援している。

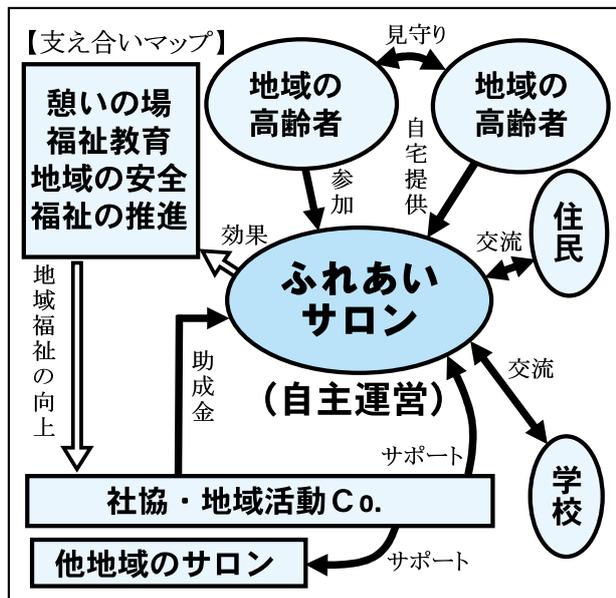
支援を行っていく上で、コーディネーターの島尻郁子さんは、「社協ではサロンと地域をつなぐことを心がけています。」と話す。22ヶ所全てのサロンにかかりきりになるのではなく、住民の主体性を育て、地域の中に協力者を増やしていくことに力を入れているとのこと。その結果、多様かつ独自性のあるサロン活動が多く誕生し、いずれもが活動を長続きさせている。

ここでは誰もがボランティア

宮古島平良字東にある「なかよしサロン」を訪れた。なかよしサロンでは、メンバーの仲宗根文子さんの自宅で毎月第1・3火曜日にサロンを実施している。参加するのは近所に住む70代～90代の高齢者の方々と、天ぷらをお茶請けによもやま話をしてくつろいでいた。

参加者の一人下地シゲさん（83歳）は「サロンのおかげで皆さん元気ですよ」と笑う。

コーディネーターの島尻さんは、「自宅を提供している仲宗根さんだけでなく、ここでは誰もがボランティアです。」と語る。お年寄り同士がお互いの顔を合わせる機会を持つことで、まず体を動かして集まり、自然と会話も生まれ、それが介護予防・認知症予防につながっている。また、「世代間交流」と称して地域の小学生たちとふれあうことも、子どもたちに優しい気持ち、いたわりの気持ちを教えている。総じて、サロンに参加する誰もが「ボランティア」として支え合っているのである。



サロン活動が生み出すさまざまな副次的効果

宮古島市社協平良支所では、サロン活動を1つの事業としてだけでなく、他の社協事業と連動させながら、地域福祉全体の底上げを狙っている。各サロンでは地域のキーパーソンを中心とした自主運営を呼びかける一方で、社協は地域間のネットワークづくりを担い、住民が参加しやすい仕組みを整えている。例えば、サロン利用者が学校の児童生徒との交流を図ることで、福祉教育に結びつけたり、老人クラブや民生委員と連携して、見守りネットワークを進めていくなどがそれにあたる。

このように、サロンが単なる「お年寄りの憩いの場」としてだけでなく、「住民参加を実現する場」として、「社協への理解を深める場」として、「福祉の心を伝える場」としてなど、多様な役割・効果を生み出している。



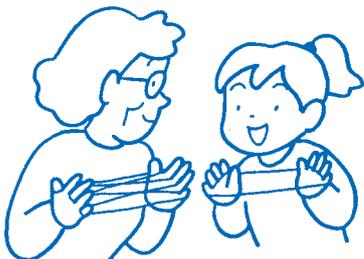
▲サロン活動を中心に地域内に連帯感が生まれている。

ふれあいいきいきサロンは地域福祉の原点

宮古島市社協の松川英世事務局長は、これからのサロン活動について「平良地区全54字での実施を実現したい」と語る。そして、住民へ福祉に対する理解と関心を持ってもらうために、社協では地域福祉懇談会を開催している。懇談会では住民とワークショップを行って地域にある福祉課題を共有し、サロンの立ち上げや今後の社協活動につなげていく考えだ。もちろん、地域住民にも実際に活動に参加してもらい、住民が主体性を持った地域活動を目指している。

また、合併前の旧市町村ごとに行われていた「生きがい対応型ミニデイサービス」についても、いずれはサロン活動と一つになって進めていきたい考えだ。

宮古島市における地域福祉の推進について松川事務局長は、「昔はご近所同士で支えあって暮らしていた。これぞまさしく地域福祉の姿。サロン活動は地域福祉の原点です。社協の第一の使命である地域福祉を進めるために、今後もさらなる広がりを目指していきたい。」と力強くコメントした。



地域の安全は自分たちで守りたい

いしゃなぎら邑むつ会・夜間防犯パトロール（石垣市石垣）

八重山群島の中核をなす石垣市は人口約4万6千人の1島1市の島である。観光産業が盛んで、近年では本土からの移住者も増え、昭和50年から比較すると世帯数は2倍に増加している。その大半は島南部にある「4か字」と呼ばれる石垣、新川、登野城、大川の地区の住民である。

活動日は週3回 回転灯を取り付けた車両で地域を巡回

石垣島南部に位置する石垣地区は近隣地区と合わせて人口が増加している地域である。この地区の自治組織「石垣字会」には、青年会や婦人会などのほかに、青年会を卒業した年代で構成される「いしゃなぎら邑むつ会」（以下、邑むつ会）というグループがあり、地域を夜間巡回する防犯パトロール活動が行われている。



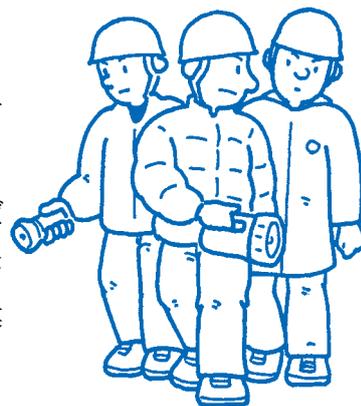
▲パトロールの出発時には重点チェックポイントを確認して送り出している。

活動日は週3回、火・木・土に行われ、活動時間はおおむね9時から10時30分の時間帯となっている。祭りなどがある場合は、深夜0時まで巡回することもある。

活動に参加しているのは「邑むつ会」のメンバー約20人と現役の青年会メンバー数名で、毎回2～3名体制で巡回にあっている。

パトロールには警察の登録を受けた車両を使用し、青色の回転灯と独自のステッカーを取り付け、住民へのPR効果を生んでいる。現在、邑むつ会だけでも3台を登録しているが、これらの車両はいずれもメンバーの自家用車を無償で提供しているものである。

巡回中に中高校生を見かけた場合は、声をかけ帰宅させたり、不審者などの情報などは必要に応じて警察に通報している。深夜徘徊は青少年の健全育成に悪影響を与えるばかりでなく、事件・事故の被害に巻き込まれる危険性が高くなるということで、これらを未然に防止し、安心して暮らせるまちづくりを目指している。



「自分たちの地域は自分たちの地域で守りたい」

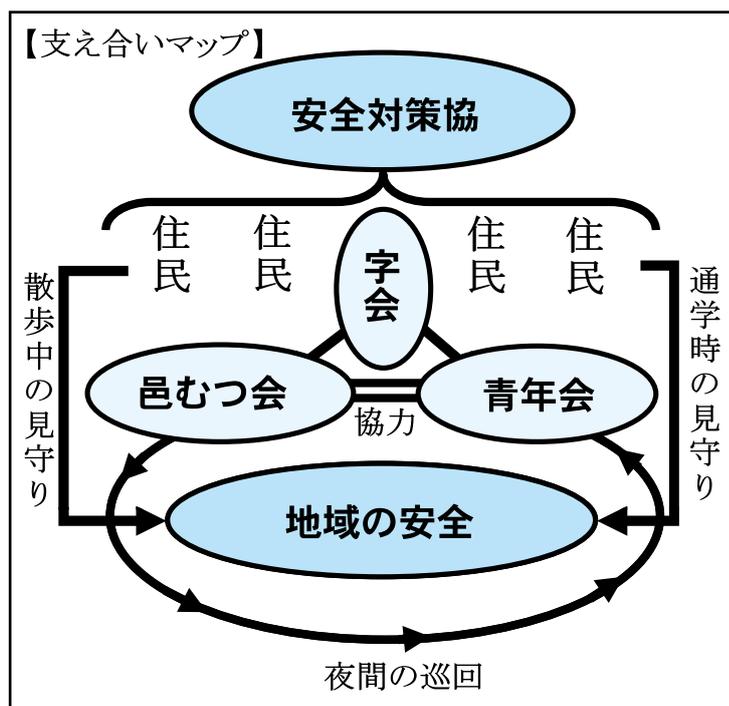
石垣地区はかねてより地域のつながりを大事にする文化が色濃く残っている地域である。豊年祭などの島の伝統行事には住民一丸となって取り組んでおり、「邑むつ会」も地域の伝統文化を次世代に継承すべく、青年会への芸能指導や祭り行事の運営などを行ってきた。

そんな中、昨今の少年犯罪の増加などを背景として「こうした問題は、本土や本島だけの問題ではない。自分たちの地域の安全は自分たちで守っていかなくては」とメンバー間で話が持ち上がり、平成14年に夜間パトロールの活動がスタートした。

それぞれの立場で 地域で支える防犯対策

邑むつ会だけでなく、石垣字会では地域ぐるみで防犯対策に取り組んでいる。

平成17年1月に同地域で通学途中の男子児童が酔った男性に殴られるという事件が発生した。この事件を契機に住民の防犯に対する意識がより一層高まった。



字会では警察と対策を検討し、老人クラブの協力を得ながら「シルバーモーニングサービス」を導入。これは、地域のお年寄りが登校時間帯に通学路で児童生徒の見守り・声かけを行うもので、平日は毎日実施されている。このほかにも早朝ジョギング愛好者のグループや、愛犬の散歩時に見回りを行う「ワンワンパトロール隊」など、地域ぐるみでの活動へと発展し、「八重山地区安全なまちづくり推進協議会」から初の防犯対策モデル地区の指定を受けた。

パトロール活動の留意点とは

夜間パトロールでは、自転車の無灯火や二人乗りに対する注意や、街中でたむろしている中高校生を注意し、帰宅させるといった活動を行っている。邑むつ会の代表を務める玉代勢秀孝さんに、夜間パトロール時における留意点について話をうかがった。

まず、見回りを行う場所については、警察のパトカーがあまり巡回しないような所もくまなく点検しているとのこと。そして、見回りの出発の前には、よく中学生の「たまり

場」になっている場所を伝え、重点的にチェックしているとのこと。

また、ただ一方的に注意して強制的に解散・帰宅させればよいというのではなく、声かけの後に生徒の返事（声）を聞くというコミュニケーションを大事にしているとのことである。さらに、同じ生徒が夜遊びを繰り返しているような場合には、警察や学校にも連絡し、対策をお願いしているとのこと。



▲青色の回転灯を乗せて走る。これは、住民へのPR効果を狙ってのもの。

巡回後には活動日誌をつけることも活動の重要な要素の一つで、日誌にはこの日の何時に、どの場所で、どういったことがあったのかを逐一記録している。これにより重点的に見回りが必要な「チェックポイント」が把握できるほか、情報を共有することで防犯効果のアップにつなげている。

警察からはパトロール活動のお墨付きとして委嘱状とともに、身分を証明するための「カード」が交付され、活動時にはそのカードを携行している。幸いカード提示を求められるトラブルなどはほとんどないというが、この活動の周知、あるいはボランティアが危険な目に遭うことを防止する効果が期待できる。

近隣地区への波及でさらなる効果が期待

邑むつ会をはじめ、字石垣の住民活動で特徴的なものが、地域住民がそれぞれの立場で「防犯・安全」という共通の課題に取り組んでいる点である。

シルバーモーニングサービスに参加する高齢者、夜間パトロールに参加する青年会やそのOB、一般住民など、活動できる時間帯や回数がバラバラでも、「地域のために役立ちたい」という思いで防犯に取り組んでいる。

邑むつ会の玉代勢代表は「私たちの願いは安全で暮らしやすい地域を次の世代に残していくこと。だから、この活動はまさに住民支え合いなんです。」と話す。そして、最後に「他の地区でも防犯の取り組みが広がっていけば、さらに効果が高まると思う。」と希望を語った。

ここで紹介した事例は、福祉分野で行われてきた「友愛訪問活動」や「見守り活動」とは一見違った形に見えるかもしれない。しかし、特定の住民だけでなく地域全体が協力し、それぞれの立場で共通課題に取り組んでいる点は、大いに参考になる好例といえよう。

